

投げ込まれた矢文

先述のとおり、私たちと小豆島の関わりが、島原の乱終結のさらに数年後に始まることはすでに述べました。しかし、小豆島町には、移住のプロローグとさえ呼べる不思議な品が残っています。

「原城籠城の一揆軍から投げ込まれた矢文」

小豆島町の壺井 洋一さんの先祖

(同地区の領主は、乱当時、幕府軍の御用船の年寄りとして原城沖にいました。そんな中、原城から「矢文」が放たれます。その手紙は持ち帰られます。



二十四の瞳 映画村。

小豆島町との歴史をひもとく

主な移住先と名字	
小豆島から	北有馬町 谷川地区…八木 南有馬町 吉川地区…大崎、七條 南有馬町 梅谷地区…林田 口之津町 早崎地区…高橋 加津佐町 水月地区…松藤、酒井、久間 加津佐町 野田地区…宮崎、山本、太田、高見、門畑 雲仙市 南串山町 井上、山本、小笠原、渡辺 岡本、三木、獅子島、三宅
そのほかから	五島から 南有馬町…白倉 大村から 深江町…岩永 南有馬町…近藤 鹿児島から 南有馬町…永吉・前田 熊本から 南有馬・加津佐・西有家 久留米(柳川)から 石田 有家・布津・堂崎・南有馬 江島

※口之津町の高橋家、北有馬町の八木家などは、移住を確認できる書類が存在するが、他は口伝などによるもので、確証のないものが多い。

移住者たち

この手紙が、移住に対する考え方に少なくない影響を及ぼした。今も壺井家で大切に保管されている事実が、それを物語っています。

小豆島から移住した私たちの祖先たち。北有馬町の八木家は、小豆島町の中山地区から矢櫃地区、西田平地区にそれぞれ移住した人たちの末裔(まつえい)です。

西田平地区八木家の八木千草さんによると、「移住してきた私たちの祖先は、やはり寂しかったのではないのでしょうか。」と話します。西田平地区には四国

八十八カ所を模して、88のお地藏さまが祭られています。ふるさとを模して地藏を祭った祖先もまた、小豆島に敬慕の情を抱き、日々を暮らしたに違いありません。



北有馬町西田平の八木家。小豆島中山村の八木家から移り住んだ三男、仁兵衛が住んでいた家が今も残る。

南有馬町と内海町(今の小豆島町)の姉妹町盟約

こうして多くの人が、さまざまな文化を持ち寄り、入り混じりながら、現代へと時代は移っていきます。

「きっかけは、祖先の住むまちへ一度行ってみよう」ということでした」と、当時の南有馬町長だった松尾康正さんは言います。「その歓待ぶりに、元々身内だったかのような錯覚さえ覚えたのです」

それから、行き来を重ね、ついに昭和58年3月1日、当時の南有馬町と内海町は姉妹町盟約を結びます。最初の訪問からわずか1年足らず。その後もあり



調印式に臨む松尾康正さん(中央)。

「ブレマソンや原城マラソンなどを通じて交流を続け、それぞれが合併して小豆島町、南島原市となった今でもその交流は続いています。松尾さんは、言います。「これについては、合併して本当の交流になったこと。当時、もっと大きな単位の交流を目指したが叶わなかった。それが今できている。素晴らしいことですね」

それは、絆

平時はもちろん、緊急時にもっとも頼りになる、それが身内です。何も無いにこしたことはありませんが、万一小豆島町で何かあれば、真っ先に駆けつける覚悟が南島原市にはあります。そしてそれは、小豆島町も同じ気持ちだと思えます。

ひも(糸)の半分と書いて「絆」。半分しかないそのひも同士を結んだ、その結び目が絆だとすれば、これからも私たちは、それを固く、強く結んでいきます。

小豆島町の皆さん、これからもよろしくお願ひいたします。

投げ込まれた矢文(抜粋)

ありさまを一筆申し入れたく存じます。松倉家は、代々平穩に世を治め、人々もこれを喜んでいました。ですから、今回の一揆を心苦しく思われていること、お察しします。

そもそも、松倉豊後守(重政)殿が島原に着任し、悪政を行ったため、一揆が起こったのです。領地4万石にも関わらず、12万石余の軍役を引き受けたため、重い税を課し、新しい労役を課しました。そればかりではなく、罪なき者を捕らえ、打ち叩き、うその供述をさせ、さらにそれを理由に、金銭のみならず家財衣装まで引き取るなど、常識では考えられないことばかりです。

その後、松倉長門守(勝家)が後を継いだと聞き、よい政治を期待していましたが、実際には違い、父を凌ぐ悪政に、私たちは困りました。昨年の干ばつは特にひどく、数年来の凶作のため、餓死者が出るほどでした。税の緩和を申し出たのですが、聞き入れるところからに厳しい課税がなされました。もう少し温情があってもよかったですのではないのでしょうか。

ところで、昨年、日本中にキリシタン禁止令が出されました。そもそも自国の宗教を捨て、異国の宗教を信じる者が出るのは、厳しい税金のせいです。キリシタンは、財産のない者を救い、貧しい人に施しをするそうです。これを聞いた住民が、法を犯しても、キリシタンになったのは無理ないことだと思います。普通に考えれば、

他の国の神をわざわざ信じるようなことはしないはずですよ。

本来一揆は百姓のすることではありませんが、長門守の政治はあまりにひどく、このような理由から、やむをえず蜂起したものです。もしも、長門守の首を一揆側に見せていただければ、籠城する者全員が死罪になっても本望です。このことを上の人たちにもよろしくお伝えください。なお、私たちは、5年3年どころかもっと多くを準備し、今回の一揆に臨んでいます。来月末には、異国から大船が多く加勢に来るそうです。このように申し上げるのは、攻める寄せ手の皆さんにも命を大事にしてほしいと思うからです。もちろん松倉家を大切に思う人たちは、全て敵となる一方で、そうでない人もあると思います。内緒で申し入れるものです。私の名は、事が済めば、後日明らかになることでしょう。



投げ込まれた矢文。香川県小豆島町壺井洋一さん所蔵。昨年11月に市議会が小豆島町を視察訪問した際に撮影したものの。

*この特集は、口之津歴史民俗資料館の原田建夫館長に監修いただきました。ありがとうございます。